シティズンシップと政治的判断力についての一考察

中村 孝文

はじめに

本稿の目的は、ハンナ・アーレントの『判断力』judgmentの概念について整理を試みることにある。彼女は、衝突、衝突、衝突を経て最終的には「思考」thinkingと「意志」willin

1970年秋学期にニューヨークのNew School for Social Researchで行われた数回の講義をベイナーが編集したものである。この著作は、アーレントの『判断力』conceptについて、彼女は生前それらを執筆することにはできなかったが、彼女はその論考が残された。アーレントの『判断力』conceptについて、彼女は生前それらを執筆することにはできなかったが、彼女はその論考が残された。アーレントの『判断力』conceptについて、彼女は生前それらを執筆することにはできなかったが、彼女はその論考が残された。アーレントの『判断力』conceptについて、彼女は生前それらを執筆することにはできなかったが、彼女はその論考が残された。アーレントの『判断力』conceptについて、彼女は生前それらを執筆することにはできなかったが、彼女はその論考が残された。アーレントの『判断力』conceptについて、彼女は生前それらを執筆することにはできなかったが、彼女はその論考が残された。アーレントの『判断力』conceptについて、彼女は生前それらを執筆することにはできなかったが、彼女はその論考が残された。アーレントの『判断力』conceptについて、彼女は生前それらを執筆することにはできなかったが、彼女はその論考が残された。アーレントの『判断力』conceptについて、彼女は生前それらを執筆することにはできなかったが、彼女はその論考が残された。アーレントの『判断力』conceptについて、彼女は生前それらを執筆することにはできなかったが、彼女はその論考が残された。アーレントの『判断力』conceptについて、彼女は生前それらを執筆することにはできなかったが、彼女はその論考が残された。アーレントの『判断力』conceptについて、彼女は生前それらを執筆することにはできなかったが、彼女はその論考が残された。アーレントの『判断力』conceptについて、彼女は生前それらを執筆することにはできないかった。彼女は、『政治哲学の復権』（1979年、新評論）や『政治理論のパラダイム転換』（1985年、岩波書店）を出版して以後のことである。
なお店においてシェトラウスの政治哲学について多くのページを割いた。藤原のシェトラウスへの関心は、彼自身の関心、すなわち、「未曾有の人類史的危機」に立ち向かうために、一般的で規範的な政治理論の復権の必要性という関心の一環だった。また、かかる政治理論の復権は、その前提として、近代の根本的なバラダイム転換の一環をなすものと位置づけられていた注１。もちろん、ここでは藤原政治学の全体を論ずることが問題ではない。彼がたびたび言及するシェトラウスは、政治哲学を検討することに目的がある。しかもそのさい、「自然権と歴史」Natural Right and Historyの主題の一部であるマックス・ウェーバー批判、とりわけ、ウェーバーの政治理論にみられる決断主義的側面に意図的に焦点を合わせて論ずる。

さて、藤原はウェーバーとシェトラウスについて以下のように要約している。ウェーバーは「事実と価値を分離し、社会科学的認識から価値判断を排除しながら、それを倫理的に中立的な学として成立させようとした。しかしシェトラウスによれば、かかるウェーバーの認識は「人間の理性によってはいかなる真正の知識も成立しない」という信念に基づいて性をみながら、かかる善の客観化と普遍化への道を学問の世界に求めるのである。注２

本稿においては、シェトラウスのウェーバー批判を基本的に継承しながら、他方で、シェトラウスの「共通善」への意志をみながら、かかる善の客観化と普遍化への道を学問の世界に求めるのである。注１

プラトンの「国家」に描かれる「洞窟」を後にし、イデアを認識した哲学者は、「洞窟」の住人と対立させるために、それゆえにここに共通善の成立の可能であるという観点があるようになる。この観点は、シェトラウスとアーレントの相違点があるように思われる。その観点は、シェトラウスとアーレントの相違点があるように思われる。それゆえにここに共通善の成立の可能性をみながら、かかる善の客観化と普遍化への道を学問の世界に求めるのである。注１

最終章において、「共通感覚」や「社会化」に焦点を合わせながら、この点に読む取れるのではないかというもののである。
シティズンシップと政治的判断力についての一考察

ところで、政治をどのようにものとして描き出すかは、人間をいかなる存在として描き出すかということと密接に関連
しらしい。その意味で、デモクラシーをさらに深化させるという課題に立ち向かうときに、人間と政治の関係をいか
にとらえるかという問題に切り込むべきスキルを明確にするのはきわめて重要であると思われる。とりわけ、シティ
ズンシップ、すなわち、市民としてのエーテスと能
力、あるいは身につけるべきスキルを明らかにするにはきわめて重要であると思われる。今日においても、もちろん、近
代的な主体としての「個の確立」は依然として強調されなければならないが、そのことは、パラパラな個の自立ではなく、
人間相互の協調関係を構築する主体（注3）のあり方の探究へと繋がってゆくものでなければならない。以下における分
析は、より広いコンテクストに位置づけばそのような視点からの分析である。

マックス・ウェーバーの政治思想が、決断主義の色彩に強く色づけられていることは周知の事実である。実際、彼が、
政治家の資質として、「闘争」への意思と選択による「決断」の重要性を著作の随所で強調する点にこのことは明白である。

この論文のなかの主要な論点は、「官僚精神」をもった政治家がドイツの戦争指導を行なっていることを批判
した点にある。その意味で、敗戦を目前にした国内の混乱という特殊状況の中での発言ととらえることもできる。し
かし、かかる理解の仕方は少々的外れである。なぜならば、「闘争」を重視する類似の発言は、一八九五年における三〇歳
の考察のウェーバーの教授就任講演として知られている「国民国家と経済政策」のなかですでにみることができるか
1. 「われわれが子孫に食ととして贈られなかったのは、平和や人間の幸福 Links geschrieben はなくして、われわれの国民的特質を護りぬき、いったん発展させるための永遠の闘い ewgen Kampf です。」（注2）さらに、同時期に以下のような発言もみられる。「世俗の政治をやろうとするのは、ありかなければならないのである。」「われわれが子孫に食ととして贈られなかったのは、平和や人間の幸福 Links geschrieben はなくして、われわれの国民的特質を護りぬき、いったん発展させるための永遠の闘い ewgen Kampf です。」

2. 「選択による「結核」については、以下の通例を挙げて、人間生活の倫理的証のように述べている。まず、亡くなれる前にあたる「九一年月の職業としての政治」からみておこう。政治家にとって必要な三つの持質として、「情熱 Legality 鍵概念の一つであると位置づけ開かれた現場に発表された「一つの道法のほか」においても同様の認識が表現されている。」

3. 「裁判官」Arguement は、政治の倫理的証のように述べている。まず、亡くなれる前にあたる「九一年月の職業としての政治」からみておこう。政治家にとって必要な三つの持質として、「情熱 Legality 鍵概念の一つであると位置づけ開かれた現場に発表された「一つの道法のほか」においても同様の認識が表現されている。」

4. 「裁判官」Arguement は、政治の倫理的証のように述べている。まず、亡くなれる前にあたる「九一年月の職業としての政治」からみておこう。政治家にとって必要な三つの持質として、「情熱 Legality 鍵概念の一つであると位置づけ開かれた現場に発表された「一つの道法のほか」においても同様の認識が表現されている。」

5. 「裁判官」Arguement は、政治の倫理的証のように述べている。まず、亡くなれる前にあたる「九一年月の職業としての政治」からみておこう。政治家にとって必要な三つの持質として、「情熱 Legality 鍵概念の一つであると位置づけ開かれた現場に発表された「一つの道法のほか」においても同様の認識が表現されている。」

6. 「裁判官」Arguement は、政治の倫理的証のように述べている。まず、亡くなれる前にあたる「九一年月の職業としての政治」からみておこう。政治家にとって必要な三つの持質として、「情熱 Legality 鍵概念の一つであると位置づけ開かれた現場に発表された「一つの道法のほか」においても同様の認識が表現されている。」

7. 「裁判官」Arguement は、政治の倫理的証のように述べている。まず、亡くなれる前にあたる「九一年月の職業としての政治」からみておこう。政治家にとって必要な三つの持質として、「情熱 Legality 鍵概念の一つであると位置づけ開かれた現場に発表された「一つの道法のほか」においても同様の認識が表現されている。」

8. 「裁判官」Arguement は、政治の倫理的証のように述べている。まず、亡くなれる前にあたる「九一年月の職業としての政治」からみておこう。政治家にとって必要な三つの持質として、「情熱 Legality 鍵概念の一つであると位置づけ開かれた現場に発表された「一つの道法のほか」においても同様の認識が表現されている。」

9. 「裁判官」Arguement は、政治の倫理的証のように述べている。まず、亡くなれる前にあたる「九一年月の職業としての政治」からみておこう。政治家にとって必要な三つの持質として、「情熱 Legality 鍵概念の一つであると位置づけ開かれた現場に発表された「一つの道法のほか」においても同様の認識が表現されている。」

10. 「裁判官」Arguement は、政治の倫理的証のように述べている。まず、亡くなれる前にあたる「九一年月の職業としての政治」からみておこう。政治家にとって必要な三つの持質として、「情熱 Legality 鍵概念の一つであると位置づけ開かれた現場に発表された「一つの道法のほか」においても同様の認識が表現されている。」
このページは日本語で書かれています。内容は以下の通りです。

...
驗科学の守備範囲外に位置づけられる。したがって、規範の妥当性（実践的命令の規範としての妥当性）

Wahrheitsgewährung einer empirischen Tatsachenfeststellung

は経験的な事実確定の真理としての妥当性
de Geltung

ウーバーの社会科学生方法論がなぜ選択されるか

さて。ウーバーの社会科学生方法論がなぜ選択されるか

それゆえ、ウーバーの社会科学生方法論がなぜ選択されるか

その
シティズンシップと政治的判断力についての一考察

背後にある彼の世界観の前提は如何なるものであったのか。次にこの点を簡単に確認しておきたい。彼は、いかなる倫理や、善に対しても、いかなる倫理の法則性や審美的法則性に対しても、いかなる文化的意識や人格評価に対しても、いかなる文化的意識や、個自自身の、言葉の最も極端な意味において、内部的なら、威厳を要求する一つの「領域」があることを前提としたうえで、かかる領域においては、われわれのとる態度が、たとえばどのようなものであるかと、いずれにしてもそのような態度決定は、いかなる科学の手段によっても証明し、定義することという、そのような考察は「価値」についてのいかにそして整然としたことを、見誤ってはならないであろう。不なる実証的な考察、すなわち、真の価値哲学はそれを越えて、絶えず、いえる所で、二者択一、だけでも、神」と「惡魔」の間において、非なる相対化も妥協も存在しない。神、悪魔の間におけるような、橋渡しのできない必死の闘争が問題になるのである。「神」と「悪魔」の間において、深い偏値の各領域は交錯し、紛糾している。このように、実在の相互のほどどんあらゆる個々の重要な決定において、むろん価値の各領域は交錯し、紛糾している。このように、言葉のそもそもの意味において「日常」というものに、浅薄化がひそんでいるとすれば、それはまさに次に存在するのである。不なる実証的な考察、すなわち、価値の間においては、結局、何というか、次に存在しないということ。またそれも、善の価値を、社会的に、不なる実証的な考察、すなわち、価値の間においては、結局、何というか、次に存在しないということ。もしこの事実についてのいかなる経験的考察も、老ミルが述べたように、それに相応する唯一の形をとらとして、絶対的決定しないで、意味解釈の考察、すなわち、真の価値哲学はそれを越えて、絶えず、いえる所で、二者択一、だけでも、神」と「悪魔」の間において、非なる相対化も妥協も存在しない。神、悪魔の間におけるような、橋渡しのできない必死の闘争が問題になるのである。
についての自己の究極的な決定を回避する、ということなのである。ところが人間的な安楽にはおよそ歓迎されないが、しかし避けることのできない認識の木の実、まさしくあの対立を知らないべきであるとすれば、それが一連の究極的な決定の鍵を意味しているということがわかるけれど、これを知らなければならないということ、に他ならないのである（注16）。

かくて、前述のごとく「究極的決定を通じて自己の運命を選ぶ」ということを前提にして経験科学の方法が導出されることがある。ここには、九一五年に書かれ、後に「政治論集」に所収された「二つの律法のはざま」と酷似した認識が吐露されている。また、サルトルに類似した自己との向き合い方をもみ出してくることができる。「政治」にかかわるすべての人間に対するウェーバーの要求は、このようにして彼の世界観に深く根ざしたものとして理解するとき、はじめて、正当な解釈が可能となる。

この世がデーモンに支配されていること、そして政治にタッチする人間、すなわち手段としての権力と暴力性とに関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであるということ、さらに善からは善のみが、悪からは悪のみが生まれるという関係をもった者は悪魔の力と契約を結ぶものであることは十分に可能である。しかし、ウェーバーの
シティズンシップと政治的判断力についての一考察

それは当然他の価値と衝突してしまうことを見越しなければならない。それに伴う「内衛的緊張」、「倫理的パラドックス」に対して描き出される必要がある。政治へのかかるコミットメントのしかたは、価値自由論においては、「文化人」が耐えるなければならない（注18）。

宗教社会学のモーティーフである「普通の合理化」への批判は、この点から説明される。ウェーバーの執筆「宗教」という言説に関しては、彼に意味と意義がやや死んだ状態であり、日常の浅薄化に打ち負かされ、「決定」、自発的な選択を忘却した生き方にはならない。

ウェーバーは、第一次世界大戦の開始を積極的に支持したカリスマ性をこらえつつも、戦争が政治教育の機会を提供してくれた、しかし、彼からの精神の戦ともいうべきズバ抜きの実現をゆがめていたのである（注20）。しかし、それは、絶望的な期待であり、ウェーバーの政治論はかかる絶望的な賭けないしか飛躍によってしか抜け出ることができない障路に取り込まれているのであろう。ウェーバーの批判をみており、シュトラウスのウェーバー批判は多くの著作の随所に散見できるが、まとまった形で展開されている著作は、もっとも人口に膚浅している「自然権と歴史＝政治哲学とは何か」であろう。そこで、以下において、主としてこの両著作に依拠
しながら、ウェーパーに対するシュトラウスの立場を確認しておくことにした。

シュトラウスは、プラトンに言及しながら、「政治的生は真に政治的生であるために哲学を必要とする」と記している注22。また次のようにも言う。「あらゆる政治活動は、より善いこととより悪いことについての何らかの考えによって導かれているのである。」注23。このように方向性が明白となり、人々がよき人生や善き社会についての知識を求めるようになる。それは、また、よき人生や善き社会についての知識を得るために哲学が必要であることを示すものである（注24）。

それでは、政治哲学とは何であるのか。シュトラウスの説明に耳を傾けてみよう。

政治哲学は、このように理解された哲学の一分岐である。それを、政治哲学は、ポリス的生の生活をともに出現する政治的行動の本性についての意見を政治的な事柄についての知識に置き換え、選択されるか否かを試みである。これが本質であるのであろう。中立的であることがその本質であるのではない。それでは、人々の服従や忠誠、裁判や裁判を要求する政治的な事柄は、それを何を基準としているかを正しく取り扱うと願うのである。もし政治哲学が自らが主題としている事柄を正しく取り扱おうと願うのであれば、政治的判断の基準を、この基準を、これらの基準について決まらないのである。もし政治哲学が自らが主題としている事柄を正しく取り扱おうと願うのであれば、これからの基準については決まらないのである。
シティズンシップと政治的判断力についての一考察

ここで重要なものは、正しい政治的秩序、善き政治的秩序の探求が政治哲学であるという指摘である。政治哲学のなか

の把握のしかたは、それらがプラトンのイデアの共存の存在するという認識を当然の前提としていると考えられる。

実シュトラウスのなかにはイデアの探求の志向性を示すことができる。その理由の第一は、シュトラウスが、政治

学はそこからの逸脱形態と位置づけられるからである注20。つまり、古代の政治哲学こそ、シュトラウスの考えるモデルであり、近代の政治哲

学はそこからの逸脱形態と位置づけられるからである注20。

第二の理由として指摘できる点は、「自然なnature」という用語の使い方である。確かに、彼は、イデアやイディスという

にとって「自然」と等価で用いている。すなわち、彼によれば、「自然」natureという用語の使い方である。確かに、彼は、イデアやイディスという

という用語の使い方は、古代ギリシアの政治哲学は、政治の秩序の自然的特性を明確にしようとする試みで

ある。彼は次のように言う、「自然のnature」というのは、ここでは、人間のありのままで人間的なものでしかないものとの

対比において理解されている。単なる気まぐれをさすおき、人間、存在が、仕方の人為contentionによってや、ある

伸ばすことができる注28。そして、後者が人間を導くべきではない。「自然」natureによって導かれているので、人々

「自然」natureという用語が、人種、意見、伝統、意見である。人間は正しい方

それに本性を持っている。類似の記述を見出すことができる。
到 judge of positive 買入 日益進步 加入 121 121 年 (日)pan(翻)
シティズンシップと政治的判断力についての一考察

ない真理の存在を前提とする形で上手に否定する。人間の思想や信念はすべて歴史的であり、したがって当然消滅する運命にあるとされる主張はその構造において価値観が否定される形で決解する。すなわち、『正義の問題』を普遍的に受け入れる形で解決することは不可能になる。すべての自然権理論が前提とする流動的連帯性を置かなければならない注34。したがって、『自然権』natural rightはその存在を否定されているわけではない。

哲学は、ソクラテスが『国家』のなかの『洞窟の比喻』で説明しているように、洞窟の外にある真理と囚人たちの眼を向け変える作業であった。哲学するもの、洞窟の外に発見するものこそが真理であり、真理を発見した哲学者は、囚人たちの生きる世界を評価しようとするからである。しかし、囚人たちが見える哲学者は、哲学者は超然的で普遍的な価値にしたがって、囚人たちの生きる世界を評価することを避けなければならない。哲学者は生命さえも危険にさらされるかもしれない。したがって、ある価値は生と緊張状態に立たざるを得ない。

しかし、哲学者が直接的に行動するためには、自然法の存在を否定することができる。一九世紀の『歴史学派』historical schoolはかかる歴史主義を否定する批評家に適用される。哲学者は、環境の変化によって価値の存在が変化することを理解することは重要である。したがって、自然法の存在は否定されるべきである。すなわち、社会学者、とりわけウェーバーの価値のない社会学に対するウェーバーの批評家は、政治の層に立つ人びとが『異邦人』にしてしまい結果を束縛することができる。ウェーバーの批評家は、哲学者が現実を解釈するうえで不可欠である。ウェーバーは、『為のOught』においての知識genuine knowledgeなどありえないと信じている。
た注37。すなわち、ウェーバーは、以下のようにしていったという。「真の価値体系について、経験的である合理的である、いかなる科学をもつことも否定したし、また科学的でない哲学的である、いかなる知識をもつことも認めなかった。」

真の価値体系の存在しない。社会科学や社会哲学のないということは、そのような対立およびその対立の意味のすべてを明確にすることができるのではないか。ウェーバーのかかるウェーバー批判は、的を射たものと言えるであろう。あらゆる選択は、統一的に個人の自由なる決断に委ねられる。そこにある個人をとっても、合理的な決断能力を行使できる場合でもあれば、非合理的な決断しかできない場合もある。もちろん、ウェーバーは一人ひとりの市民が合理的な判断力を身につけることの必要性を重視していた。『理由と倫理』のなかで「自分の魂の救済よりも自分の都市の偉大さの方を重んじた」フィレンツェの市民たちを讃えてい

シュトラウスのウェーバー批判の核心である。シュトラウスはウェーバーの立場を以下のように要約する。「人間の尊厳は、その自律性に、すなわち、個々人が自由に自分自身の価値や理想を選ぶところのうちに、『汝自身になれ』という命令に従うことのうちに、存するのである。」(注41)
しかし、[選択]基準は個人の自由で、あるいは恣意的な決定をしていた。したがって、論理的に言って、ウェーバーの立場からは、「正しい結論が常に引き出せるわけではない。神であれ悪魔であれ、何を選ぶかは個人の自由である」となる。

ウェーバーのウェーバー批判の結論は以下のようになる。

彼の内容は、旧来のきわめて一般的な見解、すなわち、倫理と政治の対立は解決不可能であり、政治的行動は時として道徳的罪を犯すことなくしては不可能であるという見解を、一般化したものにすぎない。ウェーバーの立場は、したがって、人間生活は本質的に不可避的な闘争である。人間の理性はそれを発見する力を持っている。その意味で神の助けが必要としない。ウェーバーの立場は、かかる立場を古典的政治哲学者たちが基本的姿勢として保ち続けたからである。この理解主義の発端、非超断的かつ相対主義の発想に支配されている日本の政治文化の中ではきわめて重視されるべき姿勢である。しかし、反面、「自然権」あるいは「自然的正義」は存在するし、政治のなかに導入することには慎重でなければならない。ウェーバーの立場は、マキャヴェリの理性信仰による独自への道を開きかねないリオリズムを内包されていると評価することができ、聖政治からロベスピエールの理性信仰による独裁への道を開きかねないリオリズムを内包させていると評価することができ、多面性の否定にともないかねないであろう。シャンテル・ムフが言うように「政治的なるもの」の本質。
政治と権力

この章では、特に『政治』と権力についてのアーレントの見解を整理しておきたい。周知のごとくアーレントは、主著『人間の条件』The Human Condition (HC)において、「活動」activityの概念を理解する鍵概念である。彼女によれば、活動は「公的領域public realm」が出現するとアーレントは考える（注4）。彼女によれば、活動は「公的領域」を構成する唯一の活動力である。対等な関係にある人びとが、「共に活動し、共に語ることから生まれる人との組織」であったために、「公的領域」は市民によってもっととも価値の高い活動力をとして解釈されている。また、ポリスは、人間が「生まれるときそこに入り、死ぬときそこを去る」個人の一生を超えて存在する空間、すなわち、「共通世界」でもあった注45。その意味でそ
シティズンシップと政治的判断力についての一考察

 mereka、個人の活動である政治を成立させる条件にはかかわなかった。

個々の関係には、この共通世界、すなわち「人間関係の視野」、あるいは「人間関係の視野」、それによって自己を内省する（注2）。

論と活動によって参加し、そのことによって、他者に対して自己を内省する（注2）。

人と言語において、自分がだれであるかを示し、そのユニークな人格的アイデンティティを知る（注2）。

さ、アーレントによれば、かかる「公的領域」の存在と権力は密接な関係にある。

今日政治学の領域で一般的に理解されている権力概念は、実在するかを探求することができる（注2）。

そこで、彼女は権力概念を変えることにする。権力は公的領域と出現の空間を保持する。「公的領域」は「市民相互の共同行為の場」を言える。「権力は実体的にとらえられるが、関係的にとらえるかにかかわりなく、一般的な権力のとらえ方は、支配と服従の根拠を権力に発見し、権力の源泉と位置づける。さらにその関連で、権力の正統性を探求の主題ともなる。（注3）

権力は、活動する人びとの間に現れる潜在的な出現の空間、すなわち公的領域を存続させるものである。（中略）

（注4）
権力は、常に潜在的能力であって、実力と体力のような不変の、測定できる、信頼できる实体
ではない、といったであろう。体力が持つにある個人に、個体の単独、個体の単独で、
ない、というわけではない。体力は、単独で、活動するとき、人びとの間に出
現することはできるが、それを完全に物質化するという点では、人びとの間に出
まれ、人びとが四散する瞬間に消えるものである。権力は、
同様であるが、この特性のゆえに、権力は、数あるものには団体という物質的要因と、驚くほど無関係である、注2。
市民が権力をもつために、活動する能力こそが大切であるとするならば、それは「判断力」という精神の活動にとって支えられているなければ有効に機能しない。そこで、しばらく、アーレントの「判断力」の概念について考えてみたい。それゆえ、まず第一に、判断力概念が、活動する主体の側に立った視点から論じられる場合と、観察者ないしは注視者の側から論じられることがあることである。この点の指摘は、たとえば千葉良が、アーレントの判断力概念について「解放上上の混沌の海に一定の堅塁を築く役割を果たした」と評価するロナルド・ベイナー（ビナー）の言葉から考察される「自由と政治」（九六〇年、「真理と政治」（九六七年）などにおいて、判断力概念が著作のなかに導入されるが、その後の「判断力」（公共的空間で協力し、行為する行為者への補償性という政治的な活動の著者を一層根拠づけるため）に導入されたのであってある。すなわち、判決力は「活動的生活」の視点から考察されるようになるというのである。彼は、このことを、「政治的行為主体」（political agents）の代表である「再現的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実的」思考、代表的な「現実の
シティズンシップと政治的判断力についての一考察

明している。判断は論理的推論とは異なり、普遍妥当性を強要しない。判断はむしろ判断する“現在”のひびと、すなわち判断の対象が現われる公共領域の構成員に訴える。アーレントが引き合いに出するのは、フローネーシス（実践知）とソフィア（理論知）との、アリストテレスの区別のあるものである。後者は共通感覚を無視し、前者は共通感覚に根ざしている。アーレント自身は、この点について、以下のような発言を行なっている。

ギリシアの注視者は、人生的祝祭における彼 slag is beautiful などと言える能力である。すなわち、判断力は、この実相に対する哲学の区別が明確になされているからである。すなわち、判断力は、「これは美である」と「これは正しい」と「これは合法的である」というもので、個々の出来事に応じて、政治はしぶらしが避けて通れない。哲学が本来「実相」の把握「真理」の把握をめざすところに成立するものであるのに対して、「政治」はむしろそれを避けなければならない。なぜなら、政治の世界の根底に「競技精神」の精神があるからである。政治を立法行為と区別し、と。「実相を政治の判断基準にする」とは、政治の生き生きとした実態を殴打する結果に通じて
しまおうことになる。それならば、個々の判断の正しさを保障するものは何であるのか。それは、結論を先取りすれば、共通感覚common senseである。
通世界を破壊し、共通感覚が成立する基盤を消滅させた。さらには、新型世界に対するもののが、共通世界の存立を人間

今日の根拠的な世界観外の状況のもとは、歴史にせよ自然にせよまったく考えられないので、この二重の世界喪失ー

自然の喪失およびすべての歴史を含む最も広い意味での人工のもののが喪失ーが後を残したのは、人びとを切り離すと

同時に絵かつている共通世界をもたず、絶望的に独立した分離のうちにも生きるか、さもなくば、大衆へと一緒くてを押

し込まれる人びとのせかいである。なぜなら、大衆社会は、互いに関係しあってはいても、あくまでも、大衆へと統一された世界に携わる人々を含む、人間性のうらやさしいないかたちの創立である（注72）。

そこで、マックス・ウェーバーを思わせるよう、現代世界に対する暗い認識が吐露されている。ウェーバーは「普通、経済的、分

的な状態である注73」、ウェーバーの場合のように、この問題提起に完全な形で回答を出している（注73）。われわれが、それらを必要とし、それも必要としな

い人間、「規則人」に適応し、それになくしては生きることさえできない人間を「規則人」Ordnungsmenschen、と名づけ、現代

の分裂社会、社会的主義の道徳的実現を実現するという、その後の歴史からみれば、絶望的な FLASH-在希望の見出さ

ざるをえない。それでは、アーレントの場合には共通世界の喪失、判断力の基盤となる共通感覚の崩壊という事態にどのように「対抗

しようとしたのであろうか注74」。その点を考えるために、ダントレーザのような指摘が参考になるのではないか。
シティズンシップと政治的判断力についての一考察

いか。ダントレットは「理解と政治」におけるアーレントの記述、すなわち、人間は本来先駆的なカテゴリーを知らないが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつつ存在であるが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつつ存在であるが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつつ存在であるが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつつ存在であるが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつつ存在であるが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつつ存在であるが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつつ存在であるが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつつ存在であるが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつつ存在であるが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつつ存在であるが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつつ存在であるが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつつ存在であるが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつつ存在であるが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつつ存在であるが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつつ存在であるが、破壊されたのは判断基準や、解決や評価に至る過程であることを示す。つまり、判断力の存在であると解釈し、いわば人間は本質的に判断し、開始する能力をもつ存在なのだと言いうのである。判断力は、しつし
判断力は「主観的で私的な条件」から解放されていない必要があることを意味する注7。

この引用にみられること、アーレントは実践理性が命ずる定言命令である自己一致原理と判断力を区別して、後者が相互主観的な共通感覚に基づく「他者との先取されたコミュニケーション」と「他者との潜在的な合意」にその妥当性根拠を有しているとみなしている。

さて、「視野の広い思考様式」についても少しアーレントの見解に耳を傾けてみよう。

この視野の広い思考様式は、判断力としてそれ自身の個人的な限界を乗り越えるすべてを心得ているが、他方それは、

優密な孤立や孤独strict isolation or solitudeのなかではたらくべきはない。つまりそれは、「その人の立場で」思考し、

それを考慮に入れたために自らの現前に基づく。他者を欠いてはたらくべき機会を差し仕しもたえない。論理は、それをしっかり

かかっつものであるために自己の現前に基づくように、判断力は、それが妥当するためには他者の現前依存する。

「視野の広い思考様式」は、「他者の現前」を条件とする思考様式である。判断力によって人びとは「人間関係のネットワーク」、

すなわち「公の領域、共通世界で自らの位置を定める」ようになるのであって、それゆえに、「判断力は政治的生存者と

しての人間の基本的な能力の一つ」であると彼女は考えている注78。そして、複数性が政治の基本的性格であるとするならば、

上記の引用において述べられていること、当然として、それは「他者の現前」を前提とさせるなければならない。しかも、この
複数性は、文字どおりの目に見える他者だけではなく、想像力の力によって、脳裏に呼び出された他者をふくむことになる。かかる他者との共通世界が政治の成立する世界であり、とりもなおさず、判断力の妥当性を保障する世界であると解釈することができるのではないだろうか。

それでは、アーレントは『想像力』をいかなるものと考えているのであろうか。それにについて参考になるのは、ペイニーの編集した『カント政治哲学講義』の最終部分に付け加えられた『想像力』について説明がなされている。このセミナーでの説明によれば、想像力は「存在しないもの」を現実にする能力である。このなかにこれまで我々が想像力に注目していた形態を挙げることが可能であった。「存在しないもの」を現実にする能力は、想像力の力である。ペイニーは、存在しないものを想像し、それが可能であるとするときに、想像力の力がある。それによって判断力の妥当性を保証することができる。
社交性の特性は人間の人間性にとって目的ではなく、まさしく起源であるということである。人間がただの世界に属するかぎり、社交性こそがまさしく人間の本質をなすということである（注85）。

最後に、意志力の判断概念が、活動する主体の側に立った視点から論じられる場合と、観察者ないしは注視者の側から論じられる場合において、人間の価値と尊厳を確定する者として注視者に対する特殊な事例に注視することにより、特殊を機械的に一時化するというのではなく、むしろ特殊を通じて普遍に光をあて、人間の価値と尊厳を維持する無比の人物や出来事やエピソードを着目し、それが忘却のふちから繰り出す。同時に、注視者はそれに適応するかという点について、簡易にふれておきたい。千葉真はこの点について注目すべき例見解を提示している。すなわち、彼によれば、『注視者』は、没利害的な目でもって過去の歴史における無比の人物や出来事やエピソードを着目し、それが忘却のふちから繰り出す。この解釈は首肯しきものである。全体主義的体験からはじまり、きわめて強い実践的な関心をもって続けたアーレントが、他方、その境をもって最終の仕事にしたと解することは不可能である。不自然さと違和感が伴うからである。

言及している（注88）。

「人間の自己体感これ自体は、本来の共通性をもって自己をなす」としたうえで、「行為者」actor と「注視者」spectator のどちらもが従来の格率について
シティズンシップと政治的判断力についての一考察

カントによればこうした契約は単なる理念にすぎないものである。その理念はこうした問題についての我々の反省を統制することはないが、しかし実際に我々の活動を鼓舞する。人が人間であるのは、あらゆる単独な人のうちに現前するこうした人類の理念によってであり、この理念が判断力（judgment）の原理のみならず活動（action）の原理となる程度に応じて、人は文明化されていると、人間的であるとか呼ばれるのである。行為者の格率（maxim）と、注視者が世界の光景について判断するに際して従う格率ないし「基準」（standard）が、一つになる。いわば活動にとっての定言命法は、次のように解釈できるであろう。行為者と注視者が一体となる、行為者の判断が最終的に「行為者」と「注視者」とを不可分の関係に立つものと理解していたとみなさざるをえない」という。

人類という観点は、換言すれば、根源的に「社会性」を比喩的に内在させた人間存在それ自体の観念に立つという意味であろう。その観点に立つとき、注視者の判断と行為者の判断が一体となる。「常にこの根源的契約が普遍的法則へと現実化されるような格率に基づいて活動せよ」という。

以上述べたことから、アーレントにあっては、共通感覚。「開始する能力」、「想像力」、「視野の広い思考様式」、「社交性」という人間の内在的能力の組み合わせのなかに判断力の妥当性が担保されていた。この点において、ウェーバーの取った絶望的な戦略に比べて示唆するものが大であると評価することができるであろう。そして、まことにかかる内容をもつ判断力こそ市民に求められる能力なのであろうか。
おわりに

ウェーバーの決断主義は権力政治と密接な関連があった。また、それを批判するシュトラウスの政治哲学は、「哲学」への傾斜が著しく、「政治」の複雑さ、多様性を前にするとき、それを十分な形で把握することに成功しているとはいいえない。対話と熟慮と合意形成に政治の本質をみようとするとアリストテレス以来の西洋政治思想史の核心に見え隠れしてきている伝統である「実践知」の概念に照らせば、両者ともそこから遠い距離にある。逆に、アーレントの政治理論は大いに示唆するところをもっており、さらにその内容が明らかにされていなかった。

本稿においては、ウェーバー、シュトラウスとの比較に焦点を置いたために、アーレントの『判断力』について、「思考」、「意志」との関連を十分整理して示すことができなかった。また、ウェーバーの問題的を受け継ぎながら『市民の公共性』への回復をはかるとするウェーバーマスについてもまったく言及することもできなかった。これらの点について、今後の課題としている。
Benecke, Interpretive Essay, in "LARP, pp. 104, 110, 116 - 120."


Meaning and Passions, pp. 252.


Interpretive Essays, in LRP, pp. 200.